

# 漢方トゥデイ



2025年1月16日放送

## 印象に残る症例②

### 肩の痛みに漢方が有効だった症例

浜松医科大学医学部附属病院 麻酔科蘇生科 講師 **木村 哲朗**

自分は静岡県大学の大学病院でペインクリニックを担当しています。今回は、末梢閉塞性動脈疾患に当帰四逆加呉茱萸生姜湯が効果を示した症例をご紹介します。今回は、肩の痛みに漢方が有効だった症例をご紹介します。

漢方製薬会社の漢方エキス製剤一覧を眺めて見ると、五十肩に適応のある方剤がいくつかあります。中でも二朮湯は、保険適応がズバリ五十肩のみで、有名な処方です。自分もいわゆる五十肩と思われる方々に、二朮湯を処方した経験がありましたが、あまり手応えを感じていませんでした。

症例は57歳男性、168 cm, 115 kg、BMI 40 超えの大柄な方でした。3年前に腰部脊柱管狭窄症に対して、腰椎椎弓切除術を受けました。半年前から、特に夜間に増強するNRS 6-8の両肩の痛みを自覚するようになりました。整形外科で棘上筋腱の石灰沈着性腱板炎と診断されましたが、手術適応はなく当科に相談されました。

両側の肩関節の可動域制限と棘上筋テストの陽性があり、やはり痛みの原因は棘上筋にあると考えました。超音波で確認すると、両側棘上筋腱付着部位に軽度の石灰化が見られました。肩峰下滑液包内に局所麻酔薬を注入するとNRS 1まで痛みは軽減しましたが、持続は1~2日でした。その後数回のブロックも効果が限定的で、痛みはほとんど変わりませんでした。頓用のアセトアミノフェンとNSAIDsは、すでに整形外科から処方されていました。慢性痛の方で、オピオイドの使用は避けたかったですがほかに思いつく西洋薬はなく、

手詰まり感を感じていました。冒頭に述べたように、手応えを感じたことはあまりありませんでしたが、漢方治療を再検討しました。

東洋医学的所見を述べます。とても大柄な方でしたが、筋肉質というよりは締まりのない水太り体質で、下痢をしやすいとのことでした。汗をよくかき、皮膚は湿潤していました。両肩にほとんど熱感はありません。脈は浮、虚実中間。舌はうっすらと白苔があり、腫大している印象で、歯痕を認めました。腹力は全体に弱く、軽度臍傍圧痛、小腹不仁あり。両下腿前脛骨部に圧痕性浮腫を認めました。寺澤の水毒スコアは33点でした。

強い水毒が病態の主座であることを踏まえ、二朮湯エキス7.5g分3毎食前を投与開始しました。すると、数日後より痛みが軽減し、2週間後の再診時にはNRS3に改善しました。2ヶ月ほど内服していて痛みが落ち着いていたので中断したところ痛みが再燃したため、現在も同処方を継続しています。

肩関節周囲炎、いわゆる五十肩は、肩関節の痛みと可動域制限を主な症状とする疾患群です。肩峰下滑液包炎、腱板炎、上腕二頭筋長頭腱炎や、本症例のような石灰沈着性腱板炎などが含まれます。

基本的には患部の安静、鎮痛薬、運動療法・リハビリテーションなどの保存療法が推奨されますが、肩関節は可動域が大きく、複雑な構造を有することから機能も複雑で、治療が難航することがあります。肩峰下滑液包内への局所麻酔薬やヒアルロン酸注入も試みられますが、本症例では効果が数日でした。石灰の沈着部に針を進めて生理食塩水で洗い流すパンピングを行うこともありますが、本症例ではターゲットとなるほどの石灰沈着は認めませんでした。

東洋医学的には、肩関節周囲炎は外邪の侵入や外傷、過労など、様々な原因により肩関節や肩関節周囲の筋肉の気血の流れが障害されて発症すると考えます。風寒湿邪が発症の誘因として大きく、身体が虚の病態である時に侵入します。

二朮湯の出典は『万病回春』だと言われています。原典には、「二朮湯、痰飲、双臂痛むを治す。又、手臂痛むを治す。是れ上焦の湿痰、経絡中を横行して痛みを作すなり。」と記載されています。「臂」は「ひじ、うで」とも読み、肩の付け根から肘までの上腕全体を意味します。したがって、現代語訳では「肩から腕のあたりが痛むのは、経絡に水毒があるからで、これには二朮湯を用いる。また、手から肘にかけて痛むものにもよい。」という意味になります。香川牛山も『牛山活套』で、「双臂痛は多くは痰に属するなり、二朮湯を用うべし」と述べています。浅井貞庵も『方彙口訣』で、「此の方は痰で手や臂の痛むに好い、故に痰を取り気滞を行らす」と述べ、やはり水毒を目標にすべきと記しています。

現代の口訣もご紹介します。高山宏世先生の『腹証図解漢方常用処方解説』（いわゆる赤本）では、「上焦の湿痰による痛みで水毒肥満体質のものに効く」、「水毒体質、筋肉にしまりが無い、やや胃腸が弱い」とあります。秋田大学救急医学の中永士師明先生はちょうど10年前の2014年の漢方トゥデイにご出演され、二朮湯について「筋肉に締まりがなく水太り体質、関節内や滑液包内に液体貯留がある場合に有効」と述べられています。入浴で症状が緩和されるといった「冷え」がある場合にはブシ末を併用すると効果が高まると薦めていらっしゃいます。発症から数ヶ月以上経過した場合には瘀血の関与も考えて、桂枝茯苓丸などの駆瘀血剤を併用すると良いようです。

二朮湯は、蒼朮、白朮、茯苓、黄芩、半夏、香附子、陳皮、威靈仙、羌活、天南星、生姜、甘草の12種類の生薬で構成され、燥湿や利尿作用を持つ生薬が多く含まれています。嘔気・嘔吐に用いられる二陳湯に、蒼朮、白朮、威靈仙、羌活、天南星など、水毒による痛みに適した生薬が加わっています。二陳湯は、悪阻に用いられる小半夏加茯苓湯に陳皮と甘草を加えたものです。単独でも強力な利尿作用を有する小半夏加茯苓湯に、これらの生薬が加わった二朮湯がいかに利尿作用に重点が置かれた方剤であることが理解できます。

ずばり、肩の痛みだからといって二朮湯を闇雲に処方しても効果が薄かったのは、自分が病名に基づく処方を行なっていたためだと思います。今回提示した症例は、まさに水毒肥満体質の肩周囲の痛みでした。原典や口訣を大切にすること、証を捉えた方剤選択することの重要性を再認識させてもらった症例でした。

肩関節周囲炎の鑑別処方として、痛みが強く、冷えを伴う場合は桂枝加朮附湯を用いると有効な場合があります。肩関節に熱感があり、冷やすと痛みが軽減する場合には、越婢加朮湯を単独または二朮湯と併用するといいいでしょう。

最近、痛みの国際分類が再編され、従来の心因性疼痛に代わって痛覚変調性疼痛が組み込まれました。痛覚変調性疼痛は、簡単に言えば不安やうつなどの心理的な要因によるストレスが、脳や脊髄に備わっている「痛みを調節する機能」に異常をもたらし、体の痛みを感じてしまう状態と考えられています。抗うつ薬や抗てんかん薬の一部といった鎮痛補助薬が用いられることが多いですが、痛みコントロールに難渋することや、めまいや眠気、薬疹などが問題となることもあります。西洋薬で行き詰まることが多い場面で、柴胡剤に代表される漢方薬に助けられることは少なくありません。深く学ぶほどに、漢方処方の精度が高まることを実感します。今後も、さらに研鑽を重ねて臨床に生かしていきたいと思っております。